

# 税務署長の冒険

宮沢賢治

青空文庫



## 一、濁密防止講演会

〔冒頭原稿数枚なし〕

イギリスの大学の試験では牛オツクスでさへ酒を呑のませると目方が増すと云いひます。又これは実に人間エネルギーの根元です。酒は圧縮せる液体のパンと云ふのは実に名言です。堀部安兵衛が高田の馬場で三十人の仇討あだうちさへ出来たのも実に酒の為にエネルギーが沢山あつたからです。みなさん、国家のため世界のため大に酒を呑んで下さい。」（小学校長が青くなつてゐる。役場から云はれて仕方なく学校を貸したのだが何が何でもこれではあんまりだと思つ

てすっかり青くなつたな」と税務署長は思ひました。けれどもそれは大ちがひで小学校長の青く見えたのはあんまりほめられて一そう酒が呑みたくなつたのでした。なぜならこの校長さんは樽たるこ先生といふあだ名で一ぺんに一升ぐらゐは何でもなかつたのです。みんなはもちろん大賛成でうまいぞ、えらいぞ、と手をたゞいてほめたのでした。税務署長がまた見掛けの太つたぎつくばららしい男でいかにも正直らしくみんなが怒るかも知れないなんといふことは気にもとめずどんどん云ひたいことを云ひました。実際それはひどい悪口もあつてどうしてもみんなひどく怒らなければならぬはず筈なのにも係はらずみんなはほんたうに面白さうに何べんも何べんも手を叩たたいたり笑つたりして聞いてゐました。

そのはじめの方をちぢめて見ますとこんな工合ぐあひです。

「濁密をやるにしてもさ、あんまり下手なことはやってもらひた  
くないな。なあんだ、味噌みそ桶けの中に、醪にこりざけを仕込んで上に板をのせ  
て味噌を塗つて置く、ステツキでつついて見るとすぐ板が出る  
ぢやないか。廐うまやの枯草の中にかくして置く、いゝ馬だなあ、乳も  
しぼれるかいと云ふと顔いろを変へてゐる。

新らしい肥こえ樽だるの中に仕込んで林の萱かやの中に置く。誰たれかにこつ  
そり持つて行かれても大声で怒られない。煤すすだらけの天井裏にこ  
さへて置いて取つて帰つて来るときは眼めをまつ赤にしてゐる。

できあがつた酒ものだつて見られたざまぢやない。どうせにこり酒  
だから濁つてゐるのはいゝとして酸っぱいのもある、甘いのもあ

る、アイヌや生蕃せいばんにやってもまあご免蒙かうむりませうといふやうなのだ。そんなものはこの電燈時代の進歩した人類が呑むべきもんじゃない。どうせやるならなせもう少し大仕掛けに設備を整へて共同でもやらないか。すべからく米も電気で研ぐべし、しぼるときには水圧機を使ふべし、乳酸菌を利用し、ピペット、ビーカ、ビュウレット立派な化学の試験器械を使って清潔に上等の酒をつくらないか。もつともその時は税金は出して貰もらひたい。さう云ふふうにやるならばわれわれは実に歓迎する。技師やなんかの世話までして上げていい。こそこそ半分かうじのまゝの酒を三升つくつて罰金を百円とられるよりは大びらでいゝ酒を七斗呑めよ。」

まだまだずるぶんひどくにく悪まれ口もきゝ耳の痛い筈なやうなことも云ひましたが誰も気持ち悪くする人はなく話が進めば進むほど、いよいよみんな愉快さうに顔をほて熱らして笑つたり手をたた叩いたりしました。

どうもをかしいどうもをかしい、どうもをかしいとみんなの顔つきをきよるきよる見ながらその割合ざつくばらんの少しずるい税務署長が思ひました。税務署長の考ではうんと悪口を云つてどれ位赤くなつて怒る人があるかを見て大体その村の濁密の数を勘定しようと思ふのでした。それがいけないやうでしたから今度はだんだんおどしにかゝつて青くなる人を見てやらうと思ひました。ところがやっぱり面白さうに笑ひます。

税務署長は気が気でなく卒倒しさうになって頭に手をあげました。

全体こんなにおれの悪口をよろこんで笑ふのはみんなが一人も密造をしてゐないのか、それともおれの心底がわかつてゐるのか、どうも気味が悪い、よしもう一つだけ山をかけて見ようと思つて最後にコップの水を一口のんでできる丈だけ落ち着いて斯かう云ひました。

「正直を云ふとみんながどんなにこつそり濁密をやつた所でおれの方ではちゃんとわかつてゐる。この会衆の中にも七人のおれの方への密告者がまじつてゐるのだ。」

みんなはしいんとなりました。それからザアツと鳴りました。



さあ、こゝだおれを撲なぐりにかゝるやつがあるぞ、遁にげみちはちやんとしまつてゐる、あしたの午ひるころみんな仕事に出たころ係二十人一齐に自転車でやつて来てそいつを押へてしまふ、斯う考へて税務署長はシラトリキキチに眼くばせして次を云ひました。

「おれの方では誰たれの家の納屋の中に何斗あるか誰の家の床下に何升あるかちやんと表になつてあるのだ。」するとどうです、いまあれほど気が立ったみんなが一齐に面白さうにとつと吹き出したのです。もうだめだ、おしまひだ、しくじつたと署長は思ひました。そしてもうすつかりぐるぐるして壇を下りてしまひました。

## 二、税務署長歓迎会

税務署長が壇を下りましたらすぐ名誉村長が笑ひながら少しかゞんで署長の前にやって来ました。そして礼を云ひました。

「たゞ今は実に有益なご講演を寔まことに感謝いたします。何もごさいませんがいさゝか歓迎のしるしまで一献さしあげたいと存じます。ご迷惑は重々でございませうがどうかぢきそこまで御光来を願ひたう存じます。」

税務署長はいよいよ卒倒しさうになつて

「いや、それはよろしい。」とかすれた声で返事しました。「では、」村長はみんなの方に向いて

「今晚の講演会はこれで閉会といたします。」と云つてから又署

長たちの方に向き直って「さあ、ではどうぞ。」と右手で玄関の方を指しました。署長はなんとも変な気がしましたが仕方なくシラトリ属と一緒に村長たちに案内されて小学校の玄関を出すぐ一町ばかりさきの村会議員の家に行きました。村会議員の家は立派なもので五十畳の広間にはあかりがぞろつともり正面には銀ぎんび屏風やうぶが立ってそこに二人は座られました。すぐ村の有志たちが三十人ばかりきちんと座りました。たちまち立派な膳ぜんがならびたしかに税金を納めてある透明な黄いろないゝ酒が座をまはりはじめました。

みんなが交る交る税務署長のところへ盃さかづきを持ってやって来ました。

「いや、本日はお疲れでございませう。失礼ながら献盃けんぱい致し  
ます。」

「や、ありがたう、どうも悪口を云つて済まなかつた。どうも悪  
まれ商売でね、いやになるよ。」

「どう致しまして。閣下のやうな献身的のお方ばかりでしたら実  
に国家も大発展です。さあどうぞ。」

「はっはっは、いや、ありがたう。」なんて云ふ工合くあひでシラトリ  
キキチ氏の云つたやうにだんだんみんなの心は融とけて来たやうに  
見えました。が実は税務署長は決して油断をしないで絶えず左右に  
眼を配つてゐました。そのうちにいよいよみんなは酔つてしまつ  
てだんだん本音を吹いて来ました。

「や、署長さん。一杯いかゞ、どうです。ワツハツハ。濁り酒、<sup>みそをけ</sup>味噌桶（みそをけ）に作るといふのはあんまり旧式だな。もつと最新法の方はいゝな。おい、署長さん。さあ、一杯いかゞ、私の盃をあなた取りませんか。閣下あ、ハツハツハ。さあ一杯、」

「いや、わかつた、わかつた。いや、今晚は実に酩めい酩めいていした。<sup>かたじ</sup>辱（かたじ）けない。」

「ワツハツハ。やあ、今度はシラトリさん、さあ、おやりなさい。男子はすべからく決然たるところがなくてはだめですよ。さあ、高田の馬場で堀部安兵衛金丸が三十人を切つたのは實際酒の力だ、面白い、牛も酒を呑のむと酔ふといふのは面白い。さあ一杯。なかなかあなたは酒が強い。さあ一杯。」

一人が行ったと思ふと又一人が来るのでした。

「署長さん。はじめてお目通りを致します。」

「いやはじめて。」

「はじめで、はてなさつきも来ましたかな、二度目だ、ハツハツハ。署長さん、いや献杯、つゝしんで献杯つかまつ仕ります。ハツハツハ

この村の濁り酒はもう手に取るやうにわかつてゐる、本当にか、さあ、本当ならいつでもやつて来い。来るか、畜生、来て見やがれ。アツハツハ、失礼、署長さん署長さん、もう斯かうなつたらいつそのこと無礼講にしませう。無礼講。おゝい、みんな無礼講だぞ、そもそもだ、濁密の害悪は国家も保証する、税務署も保証すると、ううい。献杯、いや献杯、」

「もう沢山、」

「遁にげるのか、遁げる気か。ようし、ようし、その気なら許さんぞ。献杯、さあ献杯だ、おゝい貴様あ。」

税務署長はもうすっかり酔つてゐました。シラトリ属も酔つてはゐました。けれども二人とも決して職業も忘れず又油断もしなかつたのです。

それでももうぐたぐたになつて何もかもわからないといふふりをしてゐました。それにくらべたら村の方の人たちこそ却かへつて本当に酔つてしまつたのでした。そのうちに税務署長は少し酒の匂におひが變つて来たのに気がつきました。たしかに今までの酒とはちがつた酒が座をまはりはじめてゐました。署長は見ないふりをしな

がらよく気をつけて盃さかづきを見ましたが少しも濁ってはゐませんでした。どうもをかしい。これは決してこゝらのどの酒屋でできる酒でもない、他県から来るのだつてもう大ていはきまつてゐる。どうもをかしいと斯かう署長はひとりで考へました。そのうちさつきさつきの村会議員が又やつて来てきちんと座つて云ひました。

「いや、もう閣下、ひどくご無礼をいたしました。こんな乱雑な席にご光来をねがひまして面目次第もございません。たゞもうほんの村民の志だけをお汲くみ下されまして至らぬところ又すぎました処ところは平にご容赦をねがひます。」

署長はすっかり酔つた風をしながら笑つて答へました。

「いや、君、こんな愉快なうちとけた宴会ははじめてだよ。こん



なことならたびたびやって来たいもんだね。斯う出られたら困るだらう。」

村会議員はちらつと署長を見あげました。本当はまだ酔つてゐないかと気がついたのです。署長が又云ひました。

「どうも斯う高い税金のかかった酒を斯う多分に貰もらつちやお気の毒だ。一つ内密でこの村だけ無税にしようかな。」

「いや、ハツハツハ。ご冗談。」村会議員は少しあわてて台所の方へ引つ込んで行きました。

「もう失礼しよう、おい君。」署長は立ちあがりました。

「もうお帰りですか。まあまあ。」村長やみんなが立つて留めようとしたときそこはもう商売で署長と白鳥属とはまるで忍術のや

うに座敷から姿を消し台所にあつた靴をつまんだと思ふともう二人の自転車は暗い田圃みちをとときどき懐中電燈をぱつぱつとさせ、一目散にハーナムキヤの町の方へ走つてゐたのです。

### 三、署長室の策戦

次の日税務署長は役所へ出て自分の室に入り出勤簿を検査しますとチリンチリンと卓上ベルを鳴らして給仕を呼び「デンドウイを呼べ。」とあごで云ひつけました。

すぐ白服のデンドウイ属がいかにも敬虔に入つて来ました。「まあ掛け給へ。」署長はやさしく云つて話の口をきりました。

「ユグチユモトの村へ出張して呉れ給へ。」

「は、」

「変装して行つて貰ひたいな。一寸売薬商人がいゝだらう。あの千金丹の洋傘があつた筈だね。」

「は、ごさいます。」

「ぢや、ライオン堂へ行つてこれでウヰスキーを一本買つてねそれから広告をくばつてやるからと云つて何かのちらしを二百枚も貰ひたまへ。そいつを持って入つて行くんだ。君の顔は誰も知つてやしない。どうもあの村はわからないところがある。どうも誰かがどこかで一斗や二斗でなしにつくつてゐる。一つ豪胆にうまくやつて呉れ給へ。」

「は、<sup>かしこ</sup>畏まりました。」

デンドウイ属はもう胸がわくわくしました。うまく見付けて帰つて来よう。そしたら月給だつてもうきつと三円はあがる、ひとつまるつきり探偵風にやつてやらう。

「概算旅費を受け取つて行きたまへ。」署長はまた云ひました。「ありがたうございます。」デンドウイ属は礼をして自分の席へ帰つてそれから会計へ行つて七日間の概算旅費を受け取つて自分の下宿へ帰つて行きました。

さて八日目の朝署長が役所へ出て出勤簿を検査してそれから机の上へ両手を重ねてふうと一つ息をしたとき扉とがかたつと開いてデンドウイ属があゝの八日前の白服のまゝでまた入つて来ました。

どうもその顔がひどくやつれて見えました。署長は思はず椅子をかたつと云はせました。

「どうだったね、少しはわかりましたか。」心配さうにそれまたにこにこしながら訊いたのです。

「どうもいけませんでした。あの村には濁密はないやうであります。」

「さうですか。どう云ふやうにしてしらべました。」署長は少しこはい顔をしました。

「ニタナイのところに丁度老人でなくなった人があったのです。人が集ったらいづれ酒を呑まないでゐないからと存じましてすぐその前のうちへ無理に一晩泊めて貰ひました。するとそのうちから

みんな手伝ひに参りまして道具やなんかも貸したのでございます。私は二階からじつと隣りの人たちの云ふことを一晚寝ないで聞いて居をりました。すると夜中すぎに酒が出ました。もう一語でもきゝもらすまいと思つてゐましたら、そのうち一人がすうと口をまげて齒へ風を入れたやうな音がしました。これはもうどうしても濁り酒でないと思つてゐましたら、

「ふんふん、なかなか君の觀察は鋭い。それから。」

「そしたら一人が斯かう云ひました。いゝ、ほんとにいゝ、これではもうイーハトヴの友もなににも及ばないな。と云ひました。イーハトヴの友も及ばないとしますととても密造酒ではないと存じました。」

「その酒の名前を聞きましたか。」

「私は北の輝てるだらうと思ひます。」

署長は俄にはかにこはい顔をしました。

「いゝや、北の輝てるぢやない。断じてさうでない。そのいゝ酒がどこから出来てゐるかどの県から入つてゐるかそれをよくしらべに君をたのんだのだ。けれどもそしてそれからあと七日君はいつたい何をして居たのだ。」

「それからあとは毎日林の中や谷をあるいて山地密造酒を探して居りました。」

「あつたか。」

「ありませんでした。」

「見給へ。そんな藪やぶの中にこつそり作るやうなそんなのぢやない。どこか床下をほるかなんかしても少し大きくやってゐるだらうとはじめから僕が注意して置いたぢやないか。」

デンドウイ属はもう頭を垂れてしまひました。そのやつれた青い顔を見ると署長もまた少し気の毒になつて来ました。

「いや、よろしい。帰つてやすみ給へ。ご苦労でした。シラトリ君に一寸ちよつと来いと云つて呉れ給へ。」

デンドウイ属はしほしほ出て行きました。間もなく、例のシラトリ属がすまし込んで入つて来ました。

「君、ユグチュユモトへ行つてくれ給へ。却かへつてそのまゝの方がいい。あのね、この前の村会議員のところへ行つてね、僕からと云



ふ口上でね、先<sup>せん</sup>ころはごちそうをいたゞいて実にありがたう、と、  
ね、その節席上で戯<sup>じょうだん</sup>談半分酒造会社設立のことをおはなしし  
たところ何だか大分本気らしいご挨拶<sup>あいさつ</sup>があつたとね、で一つこ  
の際こちらから技術員も出すから模範的なその造酒工場をその村  
ではじめてはどうだらう、原料も丁度そちらのは醸造に適してゐ  
ると思ふと斯<sup>か</sup>う吹っかけて見てじつと顔いろを見て呉れ給へ。き  
つと向ふが資本がありませんで斯<sup>か</sup>う云ふからね、そしたらどう  
でせう、半官半民風にやらうぢやありませんかと斯<sup>か</sup>うやって呉れ  
給へ。そしてその返事をもうせき一つまでよく覚え込んで帰って  
呉れ給へ。いますぐです。今日中に帰れるだらう、あしたは休ん  
でもいゝから。」

「帰れます。」シラトリキキチ氏はしやんと礼をして出て行きました。署長はもう一生けん命何かを考へ込んで昼飯さへ忘れる風でした。ひるすぎはそはそは窓に立ってシラトリ属の帰るのをいまかいまかと待つてゐました。

ところがシラトリ属は夕方になつても帰りませんでした。

署長はもうみんなも帰る時分だしと思つて自分も一ぺん家へ帰るふりをして町をぐるつとまはりみんなが戻つたころまた役所へ来て小使に自分の室<sup>へや</sup>へ電燈をつけさせて待つてゐました。すると八時過ぎて玄関でがたつと自転車を置いた音がしてそれからシラトリ属がまるで息を切らして帰つて来たのです。

「どうだった。」署長は待ち兼ねてさう訊<sup>たづ</sup>ねました。

「だめです。」

「いけなかったか。」署長はがっかりしました。

おっしや

「仰つたとほり云つてだまって向ふの顔いろを見てゐたのですけれどももまるで反応がありませんな、さあ、まあそんなことも仰つしやっておいででしたがどうもお役人方の仰つしやることはご無理もあればむづかしいことも多くてなんてとり合はないのです。」

「顔色を変へなかつたか。」

「少しも変わりませんでした。」

「それからどうした。」

「仕方ありませんからそこを出て村の居酒屋へいきなり乗り込んで

であった位の酒を瓶詰びんづめのもはかり売のも全部片っぱしから検査しました。」

「うんうん。そしたら。」

「そしたら瓶詰はみんなイーハトヴの友でしたしはかり売のはたしかに北の輝てるです。」

「北の輝の方がいくらか廉やすいんだな。」

「さうです。」

「たしかに北の輝かね。」

「さうです。それから酒屋の主人に帳簿を出さしてしらべて見ましたが酒の売れ高がこのごろ毎年減って行くやうであります。」

「をかしいな。前にはあの村はみんな濁り酒ばかり呑のんでゐたの

にこのごろ検挙が厳しくてだんだん密造が減るならば清酒の売れ高はいくらかつ増さなければいけない。」

「けれどもどうも前ぐらゐは誰たれも酒を呑まないやうであります。」  
「さうかね。」

「それに酒屋の主人のはなしでは近頃は道路もよくなつたし荷馬車も通るのでどこの家でもみんな町から直ぢかに買ふからこつちはだんだん商売がすたれると云ひました。」

「をかしいぞ。そんなに町からどしどし買つて行くくらゐの現金があつた村にある筈はずはない。どうもをかしい。よろしい。こんどは私が行つて見よう。どうもをかしい。明日から三四日留守するからね。あとをよく気をつけて呉れ給へ。さあ帰つてやすみ給へ。」

税務署長は唇くちびるに指をあて、眼を変に光らせて考へ込みながらそろそろ帰り支度をしました。

#### 四、署長の探偵

税務署長のその晩の下宿での仕度ときたら実際科学的なもんだつた。

まづ第一にひげをはさみでぢやきぢやき刈りとして次に揮発油へ木タールを少しまぜて茶いろな液体をつくって顔から首すぢいっぱいに手にも塗った。鼻の横や耳の下には殊に濃く塗ったのだ。それからアスファルトの屋根材の継目に塗りつける黒いペイント

を顎あごのそこへ大きな点につけてしばらくの間じつとそんな油や何かの乾くのを待つてたが、それがきれいに乾くとこんどは鏡台の引出しをあけてにせものの金歯を二枚出して犬歯へはめました。すると税務署長がすっかり変つてしまつて請負師か何かの大將のやうに見えて来た。それから署長は押し入れからふだん魚釣りに行くときにつかふ古いきゆうくつな上着を出して着ておまけに乗馬ズボンと長靴ながぐつをはいた。そして葉書入れを逆まにしてしばらく古い名刺をしらべてみたがその中からトケウ乾物商サヘタコキチと書いたやつをえらんでうちかくしへ入れた。独りものの署長のことだから実際こんなことができたのだ。それから帽子をかぶり洋傘かうもりがさを持って外へ出たけれども何と思つたかももう一ぺん長

靴をぬいでそれを持って座敷へあがった。古い新聞紙を鏡の前の畳へ敷いて又長靴をはいてちゃんと立って鏡をのぞいてさあもうにかにかにかにかにかし出した。

それから俄かにまじめになつてしばらく顔をくしゃくしゃにしてゐたがいよいよ勇氣に充ちて来たらしく一ぺんに畳をはね越えておもてに飛び出し大股おほまたに通りをまがった。実にその晩の夜の十時すぎに勇敢な献身的なこの署長は町の安宿へ行つて一晩とめて呉れと云つた。そしたらまじめにお湯はどうかとか夕飯はいらないかとか宿屋では聞いた。署長はもうすっかり占めたと思つたのだ。そして次の朝早く署長はユグチュユモトの村へ向つた。

村の入口に来てさつそく署長はあの小売酒屋へ行つた。



「え、伺ひますが、この村の椎葦山しひたけはどちらでせうか。」

「椎葦山かね。おまへさんは買付けに来たのかい。」

「へえ、さうです。」

「そんなら組合へ行つたらいいだらう。」

「組合はどちらでございませう。」

「こつから十町ばかりこのみちをまつすぐに行くとなね学校がある

、  
」

知つてるとも、そこでおれが講演までしてひどい目にあつてゐ  
ぢやないか、署長は腹の底で思った。

「その学校の向ひに産業組合事務所つて看板がかけてあるからそ  
こへ行つて談はなしたらいいだらう。」

「さうですか。どうもありがたうございました。お蔭かげさまでござ

います。」署長はまるで飛ぶやうにおもてに出てまた戻つて来た。

「どうもせいがきれていけない。一杯くれませんか。え、瓶びんでない方。ううい。い、酒ですね。何て云ひます。」

「北の輝てるです。」

「これはいゝ酒だ。こゝへ来てこんな酒を呑のまうと思はなかつた。どこで売ります。」

「私のとこでおろしもしますよ。」

「はあ、しかし町で買った方が安いでせう。」

「さうでもありません。」

「だめだ。持って行くにひどいから。」

署長は金を十銭おいて又飛び出した。それから組合の事務所へ行つた。さあもうつかまへるぞ今日中につかまへるぞ、署長はひとりで思った。ところが事務所にはたつた一人髪をてかてか分けて白いしごきをだらりとした若者が椅子いすに座つて何か書いてゐた。こいつはうまいと署長は思った。

「今日は、いゝお天気でございます。ごめん下さい。私はトケイから参りました斯かう云ふものでございますがどうかお取次をねがひます。」署長はあの古い名刺をだいぶ黄いろになつてゐるぞと思ひながら出した。若者は率直に立つて「あゝさうすか。」と云つて名刺を受けとつたがあとは何も云はないでもちもぢしてゐた。

「今朝はまだどなたもお見えにならないんですか。」

「はあ、見えないで。」若者は当惑したやうに答へた。

「えゝ、ではお待ちいたします、どうかお構ひなく。いかゞでございませう。本年は椎<sup>しひ</sup>蕈<sup>たけ</sup>の方は。この雨でだいふ豊作でございませうね。」

「あんまりよくないさうだよ。」

「はあいや匂<sup>にほひ</sup>やかなにかは悪いでせうが生えることは沢山生えましてございませうね。」

「できたらう。」若者はだんだん<sup>ことば</sup>言も粗末になつて来た。

「どうでせうね。わたしあ東京の乾物屋なんだが貸しの代りに酒をたくさんとつたのがあるんだがどうでせう。椎蕈ととり代へるのを承知下さらないでせうかね。安くしますが。」

「さあだめだらう。酒はこっちにもあるんだから。」

「町から買ふんでせう。」

「いゝや」

「どこかに酒屋があるんですか。」

「酒屋ってわけぢやない。」

さあ署長はどきつとしました。

「どこですか。」

「どこって、組合とはまた別だからね。」若者はびたつと口をつぐんでしまひました。さあ税務署長はまるで踊りあがるやうな気がした。もうたゞ一息だ。少くとも月一石づつつくつてあちこちへ四五升づつ売つてゐるやつがある。今日中にはきつとつかまへ

てしまふぞ。

「椎草山は遠いんですか。」

「一里あるよ。」

「このみちを行っていゝんですか。」

「行けるよ。」

「それでは私山の方へ行つて見ますからね、向ふにも係りの方がおいでせう。」

「居るよ。」

「ではさうしませう。こつちでいつまでも待つてるよりはどうせ行かなければいけないんだから。ではお邪魔さまでした、いまにまた伺ひます。」

署長は小さな組合の小屋を出た。少し行ったらみちが二つにわかれた。署長はちよつと迷つたけれども向ふから十五ばかりになる子供が草をしょつて来るのを見て待つてゐて訊きいた。

「おい、椎しひたけ蕈山へはどう行くね。」

すると子供はよく聞えないらしく顔をかしげて眼を片つ方つぶつて云つた。

「どこね、会社へかね。」会社、さあ大変だと署長は思った。

「あゝ会社だよ。会社は椎蕈山とは近いんだらう。」

「ちがふよ。椎蕈山こつちだし会社ならこつちだ。」

「会社まで何里あるね。」

「一里だよ。」

「どうだらう。会社から毎日荷馬車の便りがあるだらうか。」

「三日に一度ぐらゐだよ。」

ふん、その会社は木材の会社でもなけあさくさん醋酸さんの会社でもない、途方もないことをしてやがる、行つてつかまへてしまふと署長はもうどぎどぎして眼がくらむやうにさへ思つた。そして子供はまた重い荷をしよつて行つてしまつた。署長はまるではじめて汽車に乗る小学校の子供のやうに勇んでみちを進んで行つた。それから丁度半里ばかり行つたらもう山になつた。みちは谷に沿つた細いきれいな台地を進んで行つたがまだ荷馬車のわだちははつきり切り込んでゐた。向ふに枯草の三角な丘が見えてそこを雲の影がゆつくりはせた。



「おい、どこへ行くんだい。」ホークを持ち首に黒いハンケチを結び付けた一人の立派な男が道の左手の小さな家の前に立って署長に叫んだ。

「椎蕈山へ行きますよ。」署長は落ちついて答へた。

「椎蕈山こつちぢやない。すっかりみちをまちがったな。」青年が怒ったやうに含み声で云った。

「さうですか。こゝからそつちの方へ出るみちはないでせうか。」  
「ないね、戻るより仕方ないよ。」

「さうですか。では戻りませう。」もう喧嘩けんくわをしたらとても勝てない。一たまりもないと思つたから署長は大急ぎで一つおじぎをして戻り出した。もう大ていいゝだらうと思つてうしろをちよ

つと振り返つて見たらその若者はみちのまん中に傲然がうぜんと立つて  
まるでにらみ殺すやうにこつちを見てゐた。そのそばには心配さ  
うな身ぶりをした若い女がより添つてゐたのだ。署長はまるで足  
が地につかないやうな気がした。もういまの家のもう少し川上に  
ちやんと小さな密造所がたつてゐるんだ。毎月三四石づつ出して  
ゐる。大した脱税だ。よし山をまはつて行つても見てやらうと考  
へた。そしてずっと下つてまがり角を三つ四つまがつてから、非  
常に警戒しながらふり向いて見るともう向ふは一本の松の木が崖がけ  
の上につき出てゐるばかりすつかりあの男も家も見えなくなつて  
ゐた。さあいまだと税務署長は考へて一とびにみちから横の草の  
崖に飛びあがつた。それからめちやくちやにその丘をのぼつた。

丘の頂上には小さな三角標があつてそこから頂がずうつと向ふのあの三角な丘までつゞいてゐた。税務署長は汗を拭く<sup>ふ</sup>ひまもなく息をやすめるひまもなくそのきらきらする枯草をこいでそつちの方へ進んだ。どこかで蜂<sup>はち</sup>か何かぶうぶう鳴り風はかれ草や松やにのいゝ<sup>にほひ</sup>匂を運んで来た。

ちよつとふりかへつて見るとユグチュユモトの村は平和にきれいに横たはりそのずうつと向ふには河が銀の帯になつて流れその岸にはハーナムキヤの町の赤い煙突も見えた。

署長はちよつとの間濁密をさがすなんてことをいやになつてしまつた、けれどももまた気を取り直してあの三角山の方へつゝじに足をとられたりしながら急いだ。実にあのペイントを塗つた顔か

ら黒い汗がぼとぼとに落ちてシャツを黄いろに染めたのだ。ところが三角山の上まで来ると思はず署長は息を殺した。すぐ下の谷間にちよつと見ると椎<sup>しひたけ</sup>蕈乾燥場のやうな形の可成<sup>かなり</sup>大きな小屋がたつて煙突もあつたのだ。そして殊にあやしいことは小屋がきつぱりうしろの崖にくつついて建ててあつておまけにその崖が柔らかな岩をわざと切り崩したものらしかった。たしかにその小屋の奥手から岩を切つてこさへた室<sup>へや</sup>があつて大ていの仕事はそこでやつてゐるらしく思はれた。これはもう余程の大ききだ。小さな酒屋ぐらゐのことはある、たしかにさつき<sup>ことば</sup>の語のとほり会社にちがひない、いったい誰々の仕事だらう、どうもあの村会議員はあやしい、巡査を借りてやつて来て村の方とこつちと一ぺんに手を入

れないと証拠があがらない、誰か来るかも知れない今日一日見て  
るようと税務署長は頬杖ほほづえをついて見てゐた。するとまるで注文  
通り小屋の中からさつきさつきの若い男がぼろつと出て来た。それから  
手を大きく振ったやうに見えた、と思ふと、おゝい、サキチ、と  
叫ぶ声が聞えて来た。見ると荷馬車が一台おいてある。その横か  
ら膝ひざの曲つた男が出て来て二人一緒に小屋へ入つた。さあ大変だ  
と署長が思つてゐたら間もなく二人は大きな二斗樽だるを両方から持  
つて出て来た。そしてどっこいといふ風に荷馬車につけてあた  
りをじつと見まはした。馬が黒くてかてか光つてゐたし谷はごう  
と流れてしづかなもんだつた、署長はもう興奮して頭をやけに振  
つた。二人はまた小屋へ入つた。そして又腰をかゞめて樽を持つ

て来た。と思つたらすぐあとからまた一人出て来た。そして荷馬車の上に立つて川下の方を見てゐる。二人はまた中へ入つた、そしてまた樽を持って出て来たもんだ、（さあ、これでもう六斗になるまさかこれつきりだらう、これつきりにしても月六石になる大した脱税だ）と署長は考へた。ところがまた出て来た。そしてまた入つてまた出て来た。もう一石だ月十石だと署長はぐるぐるしてしまつた。ところが又入つたのだ。こんどは月十二石だ、それからこんどは十四石十六石十八石、二十石とそこまで署長が夢のやうに計算したときは荷馬車の上はもう樽たるでぎつしりだつた。すると三人がそれへ小屋の横から松の生枝をのせたりかぶせたりし出した。

見る間にすっかり縛られて車が青くなり樽が見えなくなつても  
誰たれが見ても山から松枝をテレピン工場へでも運ぶとしか見えな  
くなつた。荷馬車がうごき出した。馬がじつさい蹄ひづめをけるやうに  
し、よほど重さうに見えた。するとさっきの若い男は荷馬車のあ  
とへついた。それから十間ばかり行く間一番おしまひに小屋から  
出た男は腕を組んで立つて待つてゐたが俄にはかに歩き出してやつぱ  
りついで行つた。(実に巧妙だ。一体こんなことをいつからやつ  
てゐたらう。さあもうあの小屋に誰も居ない、今のうちにすつか  
りしらべてしまはう、証拠書類もきつとある。) 税務署長は風の  
やうに三角山のとつぺんから小屋をめがけてかけおりた。ところ  
が小屋の入口はちゃんと洋風の錠が下りてゐたのだ。(さあもう

いよいよ誰も居ない。あいつが村まで行って帰るまでどうしても二時間はかゝる。どこからか入らなければならぬ。税務署長は狐きつねのやうにうろろう小屋のまはりをめぐつた。すると一とこ窓が一分ばかりあいだいてゐた。署長はそこへ爪つめを入れて押し上げて見たらカラツと硝子ガラスは上にのぼつた。もう有頂天になつて中へ飛び込んで見るとくらくて急には何も見えなかつたががらんとした何もない室へやだつた。煙突の出てるのは次の室らしかつた。急いでそつちへかけて行って見たらあつたあつたもう徑二米メートルほどの大きな鉄て釜かまがちゃんと煉瓦れんぐわで組んで据ゑつけられてゐる。署長は眼をこすつてよく室の中を見まはした。隅すみの棚たなのところにアセチレン燈が一つあつた。マッチも添へてあつた。すばやくそれをおろして



みたらたつたいま使つたらしくまだあつかった。栓せんをねぢつて瓦ガ斯スを吹き出させ火をつけたら室の中は俄にはかに明るくなつた。署長はまるで突貫する兵隊のやうな勢でその奥の室へ入つた。そこは白い凝灰岩をきり開いた室でたしか四十坪はがあると署長は見てとつた。奥の方には二十石入の酒樽が十五本ばかりずらつとならび横には麴かうじむろ室らしい別の室さへあつたのだ。おまけにビュレツトも純粹培養の乳酸菌もピペットも何から何まで実に整然とそろつてゐたのだ。(あゝもうだめだ、おれの講演を手を叩たたいて笑つたやつはみんな同類なのだ。あの村半分以上引くつ括くらなければならぬ。もうとても大変だ)署長はあぶなく倒れさうになつた。その時だ、何か黄いろなやうなものがさつとうしろの方で光つた。

見ると小屋の入口の扉とがあいて二人の黒い人かげがこつちへ入  
 っ て来てゐるではないか。税務署長はちよつと鹿ししをど踊りのやうな  
 足つきをしたがとつきにふつとアセチレンの火を消した。そして  
 そろそろとあの十五本の暗い酒だるのかげの方へ走つた。足音と  
 語ことばががんがん反響してやつて来た。「いぬだいいぬだ。」「かくれ  
 てるぞかくれてるぞ。」「ふんじばつちまへ。」「おい、氣を付  
 けろ、ピストルぐらゐ持つてるぞ。」ズドンと一発やりたいなど  
 署長は思つた。とたん、アセチレンの火が向ふでとまった。青じ  
 ろいいやな焰ほのほをあげながらその火は注意深くこつちの方へやつて  
 来た。「酒だるのうしろだぞ」二人は這はふやうにそろそろとやつ  
 て来た。

署長はくるくると樽の間をすりまはった。

そしたらたうとう桶をけと桶の間のあんまりせまい処へはさまつてのくも引くもできなくなつてしまった。

アセチレンの火はすぐ横から足もとへやつて来た。と思ふと黒い太い手がやつて来ていきなり署長のくびをつかまへた。ガアンと頭が鳴った。署長は自分が酒桶の前の広場へ蟹かにのやうになつて倒れてゐるのを見た。まるで力もなにもなかった。アセチレン燈もまだ持つてゐる。

「立て、こん畜生太いやつだ。炭焼がまの中へ入れちまふから、さう思へ。」

（炭焼がまの中に入れられたらおれの煙は木のけむりといつしよ

に山に立つ。あんまり情ない。署長は青ざめながら考へた。

「誰だ、きさん、収税だらう。」

「いゝや。」署長は気の毒なやうな返事をした。

「とにかく引つ括れ。」一人が顎でさし凶した。一人はアセチレンをそこへ置いてまるで風のやうにうごいて綱を持って来た。署長はくるくるにしばらくられてしまった。

「おい、おれが番してるから早く社長と鑑査役に知らせて来い。」

「おゝ。」一人は又すばやくかけて出て行つた。

「おい、云はないかこん畜生、貴さん収税だらう。」

「さうでない。」

「収税でなくて何しに入るんだ。」署長はやうやく気を取り直し

た。

「おいらトケイの乾物商だよ。」

「トケイの乾物商が何しにこんなところへ来るんだ。」

「椎<sup>しひたけ</sup>蕈買ひに来たよ。」

「椎蕈。」

「あゝこゝで椎蕈つくつてると思ったから見てみたんだ。名刺もちゃんと組合の方へ置いてある。」

「正直な椎蕈商が何しに錠前のかかった家の窓からくぐり込むんだ。」

「椎蕈小屋の中へはひつたつていゝと思つたんだ。外で待つてゐても厭<sup>あ</sup>きたからついにはひつて見たんだよ。」

「うん。さう云やさうだなあ。」こゝだと署長は思った。みんなの来ないうちに早く遁げないともうほんたうに殺されてしまふ。もう一生けん命だと考へた。

「おい、いゝ加減にして繩なはをといて呉れよ。椎蕈はいくらでも高く買ふからさ。おれだつてトケイにあ妻も子供もあるんだ。こゝらへ来て、こんな目にあつちや叶かなはねえ。どうか繩をといて呉れよ。」

「うん、まあいまみんな来るから少し待てよ。よく聞いてから社長や重役の方へ申しあげればよかつたなあ。」

「だからさ、遁にがして呉れよ。おれお前にあとでトケイへ帰つたら百円送るからさ。」

「まあ少し待てよ。」あゝもう少し待ったら、どんなことになるかわからない。署長はぐるぐるしてまた倒れさうになった。

ところがもういけなかったのだ。入口の方がどやどやして実に六人ばかりの黒い影が走り込んで来た。（もう地獄だ、これつきりだ。）署長は思った。今まで番をしてゐた男は立ってそれを迎へた。ぐるつとみんなが署長を囲んだ。

「こいつはトケイの椎しひたけ葦商人ださうです。椎葦を買はうと思つて来たんださうです。」

「うん。さつき組合へうさんなやつが名刺を置いて行つたさうだがこいつだらう。」りんとした声が云つた。署長は聞きおぼえのある声だと思つて顔をあげたらじっさいぎくりとしてしまった。

それは名誉村長だった。しばらくしんとした。

「どうだ。放してやるか。」また一人が云った。署長は横目でそつちを見上げた。あの村会議員なのだ。

「いや、よく調べないといけません。念に念を入れないとあとでとんだことになります。」

署長はまたちらつとそつちを見た。それはあの講演の時青くなつた小学校長だった。すなはちわれらの樽たるコ先生ではないか。

「いゝえ、こいつはさつき一ぺん私が番所から追ひ帰したので。どうもあやしいと思ひましたからとがめましたら権葦山はこつちかと云ふんです。こつちぢやない帰れ帰れつて云ひましたらさうですかここらからまはるみちはないかとまた云ひやがるんです。」



ないない。帰れと云ひましたら仕方なく戻って行きました。そいつをいつの間にとこをまはつてこゝへ入ったかもうこいつはきつと税務署のまはしものです」

「うん。さう云へばどうもおれにもつらに見おぼえがある。表へ引っぱり出してみろ。てめへは行つて番所に居ろ。」社長の名譽村長が云つた。

「立てこの野郎」署長はえり首をつかまへられて猫のやうに引っぱり出された。おもてへ出て見ると日光は実に暖かくほかほかあめ色に照つてゐた。（おれが炭焼がまに入れられて炭化されてもお日さまはやっぱりこんなにきれいに照つてゐるんだなあ。）署長はぽつと夢のやうに考へた。

「何だこいつは税務署長ぢやないか。」名誉村長はびつくりしたやうに叫んだ。それからみんなはにゆうと遁げるやうなかたちになった。署長はもうすっかり決心してすつくと立ちあがった。

「いかにもおれは税務署長だ。きさまらはよくも国家の法律を犯してこんな大それたことをしたな。おれは早くからにらんでゐたのだ。もうすっかり証拠があがつてゐる。おれのことなどは潰すなり灼やくなり勝手にしろ。もう準備はちやんとできてゐる。きさまたちは密造罪と職務執行妨害罪と殺人罪で一人残らず検挙されるからさう思へ。」

社長も鑑査役も実に青くなつてしまつた。しばらくみんなしいんとした。

こゝだと署長が考へた。

「さあ、おれを殺すなら殺せ、官吏が公務のために倒れることはもう当然だ。」署長は大へんいゝ氣持がした。といきなりうしろから一つがあんとやられた。又かと思ひながら署長が倒れたらみんな一ぺんに殺氣立つた。

「木へ吊るせ吊るせ。なあに証拠だなんてまだ拳がつてる筈はずはない。こいつ一人片付ければもう大丈夫だ。樺かはな花はなの炭すみ釜がまに入れちまへ。」たちまち署長は松の木へつるしあげられてしまった。

村會議員が出て云った。

「この野郎、ひとの家でご馳走ちそうになったのも忘れてづうづうしい野郎だ。ゆぶしをかけるか。」

「野蛮なことをするな。」署長が吊られて苦しがつてばたばたしながら云った。

「とにかく善後策を講じようぢやないか。まあ中で相談するとしてしよう。」村長が云った。

みんなは中へはひった。署長は木の上で気が遠くなつてしまつた。

## 五、署長のかん禁

しばらくたつて署長は自分があの奥の室へやの中に入れられてゐるのを気がついた。頭には冷たい巾きれがのせてあつたし毛布もかけて

あつた。いちばんあとから小屋を出た男が度つつましく番をしながら看病してゐた。おもてではがやがやみんなが談はなしてゐた。何でも善後策を協議してゐるか酒盛りをやつてゐるらしかった。署長がからだをうごかしたらすぐその若者が近くへ寄つて模様を見た。それから戸をあけてそして一つ戸をあけて外の大きな室に出て行つた。と思ふと名誉村長が入つて来た。茶いろの洋服を着てゐた。(そして見るとおれは二日か三日寝てゐたんだな。)署長は考へた。名誉村長は座つて恭しく礼をして云つた。

「署長さん。先日はどうも飛んだ乱暴をいたしました。」

実は前後の見境ひもなくあんなことをいたしましたとお申し訳げございません。実は私どもの方でもあなたの方のお手入があんま

り厳しいためつい会社組織にしてこんなことまでいたしましたやうな訳で誠に面目次第もございません。就つきましていかゞでございませう。私どもの会社ももうかつきり今日ぎり解散いたしました。酒は全部私の名義でつくつたとして税金も納めます。あなたは自宅まで自働車でお送りいたしますがこの度限り特にご内密にねがひませんでせうか。」

署長はもう勝つたと思つた。

「いやお語ことばで痛み入ります。私も職務上いろいろいたしましたがお立場はよくわかつて居ります。しかしどうも事こと々々に至れば到底内密といふことはでき兼ねる次第です。もう談はなしがすっかりひろがつて居りますからどうしても二三人の犠牲者はいたし方ありま

すまい。尤も私もつとに関するさまざまのことはこれは決して公にいたしません。まあ罰金だけ納めて下さってそれでいゝやうな訳です。」

「それがそのどうも私どもはじめ名前を出したくないので。」  
この時だ、表にはかが俄にはかにやかましくなつて烈はげしい叫声や組討ちの音が起つた。まるでもう嵐のやうだった。

「署長署長」誰たれかが叫んだ。署長はぱつと立ちあがつた。

「おゝ、こゝに居るぞよくやったよくやった。シラトリ、こゝに居るぞ。」

すぐ二三人が室へやの戸をけやぶつて入つて来た。

「署長、ご健勝で。もうみんな捕縛しました。」とシラトリ属が

泣いてかけて来た。

「よくわかつたなあ、警察の方もたのんだか。」

「え、総動員です。二十人捕縛してあります。この方は。」

「名誉村長だ。けれども仕方ない繩なはをかけ申せ。」署長はわくわくして云つた。

「署長ご健勝で。」署員たちが向ふ鉢はちまき巻まきをしたり棍こんぼう棒ぼうをもつたりしてかけ寄つた。署長は痛いからだを室から出た。

「樽たるにみんな封印しろ。証拠品は小さな器具だけ、集めろ。その乳酸菌の培養も。うん。よろしい。いやどうもご苦勞をねがひました。」署長は巡査部長に挨拶あいさつした。

「お変りなくて結構です。いや本署でも大へん心配いたしました。



おい。みんな外へ引っぱれ。」

そしてもうそろそろみんなはイーハトヴ密造会社の工場を出たのだ。五分のちこの変な行列があつた番所の少し向ふを通つてゐた。

署長は名誉村長とならんで歩いてゐた。

「今日は何日だ。」署長はふつとうしろを向いてシラトリ属にきいた。

「五日です。」

「あゝもうあの日から四日たつてゐるなあ。ちよつとの間に木の芽が大きくなつた。」

署長はそらを見あげた。春らしいしめつた白い雲が丘の山から

ぼおつと出てくろもじのにほひが風にふうつと漂つて来た。

「あゝいゝ句にほひだな。」署長が云つた。

「いゝ句ですな。」名誉村長が云つた。

# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一巻」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

※底本本文の編集方針に合わせて、ルビの拗音、促音、「喧嘩」  
《けんくわ》、「煉瓦《れんぐわ》」を小書きしました。

入力：田代信行

校正：齊藤知子

2005年1月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 税務署長の冒険

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>